

むかし、ある山の村に、三人の兄弟がいました。あるとき、父親が、兄弟たちにいいました。

「おまたち、いつまでもこんな山の中にいてもしかたがない。町に行っているいろいろなことを覚えて、お金をかせいで来い」

父親は、兄弟たちが出かけるとき、お金をひとりに三文もんずつやりました。

兄弟たちが山を下りて行くと、道が三つに分かれているところに出ました。そこで、三人はそれぞれ別の道を選んで行くことにしました。

いちばん下の弟が歩いていくと、村に出ました。道ばたで、子どもたちが集まってせみをつかまえていじめていました。若者わかものは、それを見て、

「おまえたち、そんなにいじめたらかわいそうだから、そのせみ、はなしてやれ」といいました。子どもたちは、

「いやだ。でも、何かくれるんならはなしてやつてもいい」といいました。そこで若者は、持っていた一文を子どもたちにやりました。そして、

「そら、行け」といって、せみを空にはなしてやりました。

若者がまた歩いて行くと、子どもたちが集まって、さるをつかまえていじめていました。

若者は、

「おまえたち、そんなにいじめたらかわいそうだから、そのさる、はなしてやれ」といいました。

「いやだ。でも、何かくれるんならはなしてやつてもいい」

子どもたちがいうので、若者は、また一文やりました。もうあと一文しか残のこっていません。

「困ったぞ。あと一文しかない。はやく町まで行かなくては」

そう思って、とつとつとつと歩いて行きました。けれども、だんだん日は暮くれて来るし、お腹は空いて来るし、どうしたものかと思っていると、家が一軒いっけんありました。

「すみません、ひと晩ばんと泊めてもらえませんか」と、若者がいうと、おばあさんが出てきて、「うちは食べる物もないし、せまくて寝ねる所もない。泊めてあげたくても泊められないよ」といいました。

「何も食べさせてもらわなくてもけっこうです。納戸なんどのすみでもいいので泊めてください」
「それでいいなら、泊まりなさい」

若者は、納戸のすみに寝ました。すると、蚊かがブンブンブンと飛とんできて、寝られませんでした。けれども、若者は、

「蚊よ。おまえも腹はらがへっているんだろう」といって、蚊に血ちをすわせてやっているうちに夜があきました。若者は、おばあさんに、

「お世話せわになりました」といって、一文渡わたしました。

もう一文もなくなったので、若者はどうしようかと思いついて行きました。ようやく町に着くと、どこかやとつてくれるところはないかと、あちこち歩きまわりました。すると、大きな店があつて、そこでやとつてくれることになりました。若者は、一生懸命けんめい働きました。

店の主人は、若者があまりよく働くので、自分の娘の婿むこにしたいと思いました。そこで、若者にいいました。

「うちの裏山うらやまに柿かきの木が何本あるか数えてごらん。わしがたばこを三服さんぷくすうあいだに数えられたら、うちの婿むこに迎えよう」

若者は裏山に行きましたが、あんまりたくさん柿の木で、どう数えればいいか分かりません。とほうに暮れていると、そこへせみが飛んできて、

「千千三本、千千三本、千千三本、」と鳴なきました。若者は、

「これは、ひよつとしたら千三本あるのかもしれん」と思いました。そこで、店にもどつて主人に、

「千三本あります」といいました。主人は、

「そのとおりだ」といいました。そして、

「その柿みの実を、ぜんぶもいでこい。わしがたばこを三服すうあいだにもいできたら、こんどこそ、うちの婿に迎えよう」といいました。

そんなわずかのあいだに柿をぜんぶもぐなんて、できるはずがないと、若者が思っていると、山からさるがやって来て、たつたつたと、ぜんぶもいでくれました。

主人は感心かんしんしましたが、今度こんどは、娘を三人すわらせていいました。

「この三人の中に、わしの娘がひとりいる。それがだれだか当てあててごらん。わしがたばこを

三服すうあいだに当てたら、こんどこそ、うちの婿にしよう」

若者は、

「そんな無理なことをいわれても、分かるはずがない」と困^{こま}っていると、蚊がふうんと飛んで来ました。蚊は、若者の鼻^{はな}の頭にちゅつととまって、また飛^まんで行って、真^まん中の娘の鼻の先にちゅつととまりました。それからまた、若者の鼻先にもどって来ました。若者は、

「ああ、これは、真ん中の娘ということだな」と思^{おも}って、

「まんなかのおじょうさんです」と答^{こた}えました。主人はおどろいて、

「ああ、そのとおりだ」といいました。

若者は娘の婿になって、大金持ちになったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『浪速の昔話』笠井典子／日本放送出版協会